

lie

ふじむららてん
藤村羅旬

風が吹くと木々の葉が揺れる。私は食堂のガラス窓を通して見る院庭の景色を一生忘れないだろう。物言わぬ木々たちではあるが、何かを語りかけているようでもある。ただ広い食堂には私一人が取り残されている。食堂には簡素な白いテーブルと椅子が並べられ、三十人くらいの患者が食事できるように整えられている。床はオレンジ色のリノリウムが貼られ、壁には患者が描いた稚拙な絵が幾つか飾られている。時々食堂を横切って看護師やドクターが通りかかるが、黙礼を交わすのみ。一人薄暗い中に俯いて座っているのは少し奇異でもあるが、誰も気に留める様子はない。ここはそういう場所なのである。早くもこの空間に同化している自分が滑稽でもあり空恐ろしくもある。さつきから病棟の方より叫び声が聞こえてくる。老婆の咆哮である。最初あれを聞いた時には暗澹たる思いをさせられた。大体人間があのような声を出すというのがもはや尋常でない。これからいったいどうなるのだろう、果たして本当にここから出られるのだろうか？妻はどうしているだろう。こんな魑魅魍魎の世界で生活していけるのだろうか。彼女の入院している病棟は私のいる病棟より規則がやや厳しく、患者も少し厄介なのである。こんなところへ夫婦そろって来る羽目になったのは、私が夫として至らぬだけでなく、人としてどこか欠陥があるからだ。ぬるく甘ったるい缶コーヒを飲み干すと、胃が少し痛む。院庭の木々たちは何も言わない。

外来ロビーは人がまばらだ。私はジーンズに黒のタートルネックセーターを着て、午前中を読書に充てるべくロビーの一番隅の座席に腰かけている。数人の患者が診察を待っている。静かなものであるが、隣の座席に腰かける白髪の老人はその手が激しく震えている。また正面玄関付近ではバットの素振りのごときものを繰り返す若者がいる。比較的大きな精神病院であるN病院は数年前大幅に改築された。この外来ロビーも清潔感があり広々としているので読書に最適である。難点は設置された下らないテレビが気になること、時々奇声を発する者に驚かされること、強制的に入院させられる患者が、喚き抵抗しながらも結局つれていかれるところに遭遇することなど数え上げれば切りがないのであるが、その際には読書も中断せざるを得ない。だがこうした異様な光景にも慣れてしまった。他の患者も事務員もそうした光景にさして興味を示す訳でもなく、時々

物憂い目を向けるだけである。

ふと気がつくと、傍らに妻と同じ病棟の大田さんが立っていた。大田さんは先日この病院で還暦を迎えた女性入院患者である。

「また本か。本が好きやなあ」

大田さんは微笑しながらここのいいか、と私の前の座席を指す。私はどうぞ、と心よく答えた。大田さんはくたびれたジャージの上下に延びっぱなしのパーマヘア、やや大柄な女性である。

「あんたも大変やな。そんなに痩せてしもて。ここに来てもう一カ月になるか？」

「ええ、そうです。大田さんこそ調子はどうです」

あかんあかん、と大田さんは手振りで示そうとする。大田さんは妻と同じ病棟でもう一年くらい生活しているが、妻が大変お世話になってる方だ。病気自体はもうよくなくなってきていて、現在はアパートを探しているのだが、なかなか上手くいかないようである。時々息子さんが見舞いに来てはいるが、やはり女性の一人暮らしで大田さんくらいの年齢であると難しい様だ。さっぱりした性格なのであるが、アパートが見つからない事に多少いらだっている。

「家早く見つかるといいですね。本当にここにいただけで駄目ですね」

「そうや、ここで生活しとるだけで病気になる。長くおる人には失礼やけどな。ほんま、早よ出たい」

前はどこの会社の会社員の社員食堂で働いていたらしいのだが、ここへ来ることになった経緯を詳しくは知らない。そうですよねえ、と私は頷く。

「あの、志穂のことありがとうございます。大田さんがいてくれて本当によかったと思っっているんですよ」

「いや、世話になっとるんは私の方や。ええ子やな、あの子は。ちよっと今はまだ落ち着きが足らんけどな。心配やろうけど、あんたも自分のこと頑張るや」

私は妻の付き添いという形で入院したつもりである。私自身は入院の必要性などないつもりだった。しかし、一歳年上の妻と私の関係性が病んでいるのであって、やはり私も入院の必要があったようだ。入院直前の日記などを捲ってみると、明らかに狂っている。少なくとも視野狭窄に陥っていたのは確かだ。もうすぐご飯やな、と大田さんは伸びをする。

「調子はどう？」

「最悪」

俯いた妻は冷め切ったシチューを口に運びながら答える。なんだか疲れ切っているようで、ばさついたセミロングの髪が皿に入りそうだ。さらに痩せたな、と思った。血色も悪くていかにも病人という様子だ。よれよれの寝間着が痛々しい。これでは何のために入院してきたのかわからない。

「昨日、ついにキレたで」

話によると入院当初から隣のベッドの患者が夜中にながさが探し物をするので、睡眠を妨害される。果ては意味不明な呪文のごときものを唱えだし奇声を発する。その患者に妻は耐えに耐えてきたのだ。しかし、その患者に注意をしたといっても、看護師の目には精神病患者同士の諍いとし映らないのだろう。妻は看護師から厳重に注意を受けた。

「私、悪くないのに。もういやや、部屋替えてもらいたい」

たぶん部屋は替えてもらえないだろう。

「そうやなあ、そんな本来の病気と関係ないところで悩まなあかのやったら入院の意味ないな。もう帰るか」

「帰ってもまた地獄が始まるだけや。光ちゃんのこともうこれ以上苦しめたない。ここで頑張らな道がないんや」

私たちは自分の希望で入院したのではあるが、ほとんど保護されたようなものである。7年ほど前から妻は体調を崩し、一時は寝たきりになった。私は献身的な努力を続けて仕事も辞めた。半介護状態である。義母が時々料理など作って見舞いに来ることもあった。その度に義母は涙を流す。娘をよろしくお願ひします、と言い残してドアが閉まる度に、私は苦しい思いをした。自分はそんな言葉に値する人間ではない。人間ですらない、悪魔だ。お義母さん、僕はあなたを騙しているのです。そう叫びたかった。

しかし、現実問題として入院に向いてない人もいる。私たち夫婦も前の主治医が言うには入院向きでないらしい。食事を終えた入院患者がフラフラと部屋へ帰っていく。我々夫婦だけが食堂にとり残される。

「あんまりここに馴染みすぎてもあかんからな。あのフラフラ歩いとる人らと同化しても問題あるし。でも、僕の部屋はええ人ばかりやで。これは意外やったな」

「ええなー、羨ましい。というより人徳なんちゃう？ 光ちゃんは誰とでも仲良くなれるやん」

妻は少しだけ歯を見せて笑った。

「私はあかん、生きていても自分も苦しいし、人にも不快な思いさせるだけや」
「ちよっと鬱やな」

そうかもしれん、と妻はテーブルに顔を伏せてしまった。疲れ切っているようだ。今年三十五歳の彼女の頭部を見ているとはや白いものが目立つ。苦勞させたな、と心で詫びた。

「ほら、もうすぐ薬の時間や。薬飲んだらましになるかもしれん。一旦帰ろ？」

私は二人分の食器を返却し、妻をなだめつつ食堂を後にした。暗い廊下を渡って外来のエレベーターの前まで来ると、病棟に降りたない、いやや、と妻がしくしく泣きだした。妻を説得してデイルームに戻るのに三十分を要した。

デイルームというのは、まあ娯楽室のようなものである。とんでもない音量のテレビと入院患者の奇声が交じり合い、一種異様な様相を呈している。なぜかヘッドギアをしている患者がいる。俯いてぶつぶつ言っていたり、自動販売機に怒鳴っている患者もいる。と思えば、隅の方で読書をしていたり、ごく普通に談笑している患者もいる。デイルーム内の詰所の中では事務員と看護師がぼちぼちと仕事をしている。やがて服薬の時間となった。アナウンスが流れると、患者たちはゆらゆらと立ち上がり、詰所に向けて一列に整列して待つのだが、これもまた異様な光景である。薬を飲むと、また誰もいない食堂に出た。妻も服薬を済ませて戻ってきた。

「私のせいで注意されたやろ、服薬の時間守れって。これで光ちゃんも印象悪うなる、保護室行きや。私のせいや」

立ったまま両手を強く握りしめて妻は泣いた。

「阿呆やな、そんなことありえへん。ちよつと落ち着きや、これから腰を据えて治していかなあかん時やろ、どこにも行かんから僕は。こんな所までついてきたやんか」

私はおどけた振りをして両手を広げてみせた。私たちは誰もいない食堂の片隅のテーブル席に腰かけた。寒いか？とたずねると、妻は首を振った。

「もう、いい。そんなにしてもらうの私には勿体ない。いつもいつも迷惑ばかり。ごめん、ほんまに。私も自分でおかしい思ってるんや。気分が上がったり下がったりで、こんな所まできて光ちゃんはまた私のお守りや。頑張らなあかんってもつと自覚せなあかんのに……でも不安で不安でしようがないんや。そのうち私、捨てられる」

「そんなことないって」

テーブルにポタポタと涙の落ちる音が響く。私は続く言葉を発せられないでいる。助け船が入った。

「邪魔か？」

大田さんである。売店で買ったカップラーメンの袋をぶら下げている。昼間とは違う

ジャージを着て、その上にダウンベストを羽織っている。大田さんは妻の隣に座り背をさすりながら、

「志穂ちゃん、明日診察やる。先生に言いたい事全部言いや。ほら、ご主人困つとるで」
妻はテーブルに突っ伏したまま頷く。身体を震わせ呻くように泣く姿は正視することができなかつた。薄暗い食堂に妻の泣き声が響きわたる。地獄だと思つた。

大田さんの隣に女の子が立っているのに気がついた。私が椅子を勧めると、小さく礼をして腰かけた。

「泣いてるんですか？」

「え？」

泣いてなどいけませんよ、と私は横を向いて目を擦つた。黒髪のポブカットで一目して摂食障害とわかるほどに痩せている。

「ああ、この子は私らと同じ病棟の患者や」

大田さんが私に紹介する。私は妻がお世話になっております、と頭を下げた。

「いつも外来で一緒にいますよね、奥さん本当に守られているって感じ。素敵だと思えますよ。私、いつも羨ましいなって見てたんです」

「いえ、僕は鬼畜です」

女の子は一瞬固まってしまった。大田さんは志穂の肩に手を置きながら、

「ふふ、このご主人もちょっと変わつとるんや」

変わっているというより、人でないのだ、悪魔なのだ。私がこんな状態に妻を追いつたのだ。涙を隠すために私は院庭の木々を眺めるふりをした。

「泣いたらええ、ここは泣いても許される場所や。絶叫してもええで」

私はガラス窓に額を押し付け忍び泣いた。木々は何も言わずに風に揺れている。院庭の向こうに別の病棟が見える。明るい室内に無音で看護師が立ち働いている様子が見える。何故か祈りたいような気持になった。

午前五時に目が覚めた。ダイルームの方では何か叫んでいる声と、ビーゴトン、という自動販売機の音がする。一般にこの病気というものは睡眠障害を伴う。入院患者はきつい薬で眠るのが常だが、それでもなかなか眠れない人も多いのである。私は起きだし、ダイルームへお茶を飲みに行った。おはよう、とすでに起きている患者に挨拶をする。おはよう、と返ってくる人もいるが、その場で凝固しぶるぶる体を震わせる人もいる。もう、あまり気にしないでいる。私は隅の席に腰かけお茶を飲んだ。お茶は中途半端にぬるい。熱い茶は危険というので配慮がなされているのだ。担当看護師の古田さん

が私を見つけてやってきた。

「どや、調子は」

大柄な男である。丸顔で糸のような細い目をしている。喋り方はぞんざいであるが、仕事熱心な青年である。

「うーん、眠りにくいね、やっぱり。集団生活やから気つかうことも多いしね」

「そっか、薬はおおてるか？ イライラして飛び起きるなんてことないか」

世話になってる看護師ではあるが、この口調には時々ムツとする。

「奥さん、今日診察やね。横田先生は名医やからもう、お任せしといたらええよ。藤井さん夫妻は横田先生に診てもらえてラッキーやで」

横田医師は私とほぼ同じくらいの年であろう。精悍な顔つきとジムで鍛えた肉体が印象的である。診察は大抵早い、思いもよらないアドバイスをくれることもある。

「うん、先生がほんまに頼みの綱や。なんとか、うまくいくといいんやけど」

大丈夫、大丈夫、と古田さんは宥めるように私の肩をたたく。古田さんは仕事へ戻っていった。それでも私は彼のことが嫌いではない。

まだ薄暗いが、病棟の大窓から院庭の木々の枝がやや強い風にしなるのが見える。私の心は少しざわめき、妻のことを案じる。こんなことでは駄目だな、と自嘲を加えその感覚をすぐに打ち消した。

朝食はロールパン二個にパックの牛乳である。私はいったい囚人であろうか、なぜこんな辱めを受けなければならぬのか。

「これなんや、僕らなんか悪いことでもしたんか？ なあ、おい」

妻は微かに笑うが何も言わない。昨日の混乱は影を潜め、今日の診察に希望を持っている事が窺える。

「これでもN病院は食事がましらしいからな。他の所はほんとにひどいらしいで。飯がこんなんじゃ力も入らんし、気力も萎えるってもんや」

私は少し嬉しくなって、意味のないことをしばらく話した。私自身の昨日の混乱が恥ずかしくもある。起きてからの憂鬱な気分は消えていった。

「僕、煩いかな？」

「煩い」

妻は冗談めかしてそう答える。周りでは他の患者がもそもそとパンを咀嚼している。

「ん、仲ええな。精神病院でデートか。あんたらも変わり者やな」

大田さんである。いま起きてきたところ、という様子だ。

「あ、お早うございます。いい天気ですね。それにしても昨日はみつともないところを見せましたね」

私が挨拶をすると、大田さんはガラガラと椅子を引いて、どすん、と座り込む。

「お早うさん。まあ、あんたらの場合診察受けてもなんやな。でも心の中に溜まってる悪いもんをどばーっと吐き出すだけでもえらい違いや。こういうのをな、カタルシス効果って言うんや。賢いやろ」

私と妻は曖昧に笑った。診察は午前八時半から。服薬を済ませたら妻はすぐ外来へ出なければならぬ。

「私、頑張るよ、本気で治す。なんかいい朝やね、ここから見える院庭の景色私好きやわ。なんか、何もかもうまくいくって今日は信じられる気がする」

突如、後ろで罵り合いが始まった。またか。

「ああ、あのおっさん二人は犬猿の仲やからな。ええかげんにしてほしいわ。こんなええ朝やのに、気分悪うなる」

大田さんはぶつぶつ言うが、妻は気にしていないようだ。

「いいよ、こんな日常茶飯事やし。私も変な人慣れてきた。さ、病棟戻って薬もらって外来行くわ」

私は三人分のロールパンの袋、牛乳の空きパックを所定の場所に捨てに行った。

「じゃ、光ちゃん、行ってくるわ。私頑張るし」

私は小さく頷いた。

午前中はダイルームで新聞を読んだり、見たくもないテレビ番組を見たりした。よく観察していると、朝から晩までテレビの前にいる患者も多い。そして就寝の時間にはずっと寝に行き、朝が来てまたテレビの前に座る。娯楽が他にないのもあるが、よくもまあ一日中飽きもせずに、と感心する。もつとも余計なことを考えないための方策であるかも知れないが。ぼんやりテレビを見てると半分眠りそうになってきた。うつらうつらしていると、私の名を呼ぶものがある。榎田さんというおじいさんである。この患者は一步前に進んではまた一步戻るといふ確認行為がやめられない。さらにその発する言語が理解しづらい。

「あうああ、おふはん……」

私はその言語を理解しようと努めた。だが、わからない。そのうち榎田さんは自分の言葉が理解されないのに少しいらだってきたようだ。

「あうあああ、ああ、おふはん、な、な」

弱ったな、と助けを求めて詰所の方に目を向ける。職員は黙々と仕事をしている。が、別の患者が助けてくれる。

「奥さん泣いとる、って言うとるで」

私は榎田さんに礼を言っつて、外来の方へ駆け出した。

外来では頬を軽く切った横田医師だけが立ちつくしていた。外来ロビーは妙に静かである。私は歩み寄り軽く頭を下げた。

「藤井さん、申し訳ない。私の不用意な発言で奥さんを刺激してしまったようです」

私はだんだん事の次第が読めてきた。おそらく妻が横田医師の言葉を曲解し過剰反応した挙句、騒ぎを起こしたのであろう。妻の姿が見えない。

「奥さんには鎮静剤を投与して、休んでもらっています。だが、今はご主人も会わない方がいい。今夜もう一度病棟に行きます」

私は妻が騒ぎを起こしたことを丁寧に詫びたが、内面では横田医師への不信任感、怒りが込み上げていた。

「でも、どうして……」

「子供の話になりましたね。奥さんは私の言葉を曲解してしまったようです。私としても軽率でした」

私たち夫婦には子供はいない。もちろん妻は子供をほしがっていたが恵まれなかった。二人で買い物へ出かけた時など、当然ながら親子連れの姿が目に入ってくる。そんな時つらいだろうな、と胸を痛めていたものだ。

「とにかく今後のことを考えましょう。いずれにしても奥さんはかなり不安定な状態です。セロクエルちよつと増やしてみます」

このような場に及んでも投薬治療の話をする横田医師に憤りを感じたが、よろしくお願ひします、と深く頭を下げた。その言葉が終わらないうちに横田医師はさっさと次の仕事に歩み去った。大体こういう病院の医師というものは多忙を極めている。それはわかる。しかしながらそれが軽率な言葉を発してよいという理由にはならないはずだ。また現在の精神医療では投薬治療が中心である。だが、薬をだらだらと飲み続け病気の方はちつとも改善せず慢性的となっている患者のなんと多いことか。なにか言い知れぬ違和感、不信任感を味わいながら私は外来ロビーを後にした。

私は病室のベッドに寝転がった。さて、どうするか。私たちは自らの希望で入院したので基本的にいつでも退院できる。が、今帰ってもまた地獄が始まるだけだ。もう少し

横田医師を信頼してみるか。私は天井を見つめている。この病室でいたいどれほどの数の患者がどんな思いでこの天井を見つめてきたのだろう。生涯をここで終える人も少なくないのだ。恐らく妻は保護室に入れられたのだろう。保護室とは暴れたりする患者が半ば強制的に入れられる独房のようなものだ。二畳ほどの部屋にトイレが備え付けてあるだけであり、外部とは分厚いドアによって遮断されている。鎮静剤で眠っているといいのだが。きっと夢さえ見えてはいないだろう。

妻が保護室入りになってから一週間。付き添い入院のはずの私もどうやら十分に病んでいるらしいので、午前中の診察で少し思っていることを話そうと思っている。横田医師には失望したが、まあ仕方がない。この病院を「利用」することにする。我々夫婦は共依存に陥っていると指摘を受けた。どうしたらそれから抜け出すことができるのか？

「なかなか抜け出そうと思っても、根本的には難しいものなんですよ。お二人は今とてもしんどい。あなたもものすごい重圧の中で生きているのはよくわかります」

私は背もたれに座り直し手を組んだ。

「私は自己肯定感が極めて低く、罰せられる存在だと思うことがあります。所謂罪業妄想です。社会的に何ら価値のない自分に価値を見出すため妻に尽くしている。それは認めます。まあ、頭でわかっているもなかなか難しいのでしょうけど」

横田医師はかりかりとカルテに何か書き込んでいる。私の言うことには答えずに、健康についての質問を少しした。

「藤井さんはね、もう少し身体を動かしたらどうです。そろそろ変な人とウォーキングに行くのは嫌でしょうが、運動のプログラムに参加することを私はお薦めします。健全な肉体に健全な魂は宿る、侮れない言葉ですよ。およそ魂が健全でなければまともな人間関係は築けないと言っています。結婚でも恋愛でもそうですが、魂が病んでいてはどうしても歪んだ様相を呈してきます。はい、じゃ明日からウォーキング参加ね」

私はしぶしぶそれを承諾した。妙な連中とそろそろ歩いて好奇の目に晒されるのには閉口するが、一理あることだ。

「奥さんはそろそろ病棟に戻ることになりましたから。安心なさい。じゃ、様子見て下さい」
私は礼を言って診察室を出た。

外来はいつもの様子で得体のしれぬ狂気を孕んでいる。缶コーヒーを飲みながら一服すると目の前を異様に短いショートパンツ姿の中年女が通り過ぎる。私は少し不快にな

る。下らないテレビが点けっぱなしになっている。なんだか連続ドラマの再放送をやっているが、このドラマを病棟の人たちは欠かさず観ている。ふと、テレビに映っている女がこんなことを口走った。

「あんたが責任、責任と思いつめとるんは単なるうぬぼれや！」

統合失調症の患者はテレビが自分のことを言っているとか、どこかに隠しカメラがあると主張したりすることがあるが、この言葉は私の心を打った。この女は私を知っているのではなからうか。なぜこのタイミングでそんな言葉を私に投げかけるのか。

大体、異常に燃え上がる感情というのはどこか魂の欠陥、不健全さを反映している。

妻に対する感情は執着だと思う。本当に愛しているのではない。それを理詰めで愛しているとねじ伏せようとしているのだから無理な話だ。その上で浅はかに被害者を気どり、まさにうぬぼれているのだ。自分を愛しているのに過ぎない。妻への思いは私の不安が形となったに過ぎないのだ。妻は私である。ああ、妻は他の男と結婚すればよかったのだ、何故よりによって私なんかと。そうやって自分に酔うのも悪い癖だ。

「目が怖いで」

顔を上げると看護師の古田さんだった。手に書類やカルテを抱えきれないほど持っている。私を見かねて声をかけたのだろう。いい奴じゃないか。

「まあ、ここは自分を見つめなおすのにいい場所かも知れんけど、ほどほどにな。過ぎたるは及ばざるが如しやで」

不覚にも私は目を潤ませた。心が弱り切っているのだ。私はものが言えなかった。古田さんは察して私の肩をポンと叩いて仕事に戻った。去り際に奥さん病棟に戻ったで、という言葉を残して。

「お勤めご苦労さん」

私は保護室から出てきたばかりの妻と誰もいない食堂で再び待ち合わせた。いくらかぼうつとしていたが無理もないことだ。

「あそこに閉じ込められとったら氣い狂う。地獄やった」

妻の青白い顔が夕闇に浮かんで私はそれを美しいと思った。さらに痩せたように思う。

「もう帰るか？」

ちよつと考える、と妻は俯いた。髪が覆いかぶさって表情は窺えないが、疲労が身体から滲み出ている。はつきり言って何週間も保護室に入れられることが治療とは思えな

い。荷物をまとめてもうマンションに帰ることにするか。しかし今帰っても地獄なのは目に見えている。いっそのこと二人この世から消えてしまおうのがいいのだろうか。

「横田先生も酷いな」

妻は身体を震わせて頷いて、

「光ちゃんだけが味方やって信じてる。お願いやから見捨てんといて」

この幼い言葉に妻は退向しているのだろうか、という疑念がわいた。入院して事態が悪化こそして、まるで良くなつてはいない。やはり私たちは入院しても意味がなかったのか。しかしこの状態で今マンションに帰っても地獄が再開するだけだ。私はすでに妻をお荷物に思っているのだろうか。一番つらいのは妻ではないか。それを巧妙に自分が被害者であるようにすり替える私はなんなのか、妻のことをすでに見捨てているくせに私の妻への感情は憐憫でしかない、それを認めるのが嫌なだけだ。それなのになぜこんなことを言うのだろうか。

「寒いやろ。なんか羽織るもん取ってきてやろうか」

腐った言葉だ。

「うん、いいよ。大丈夫」

二週間ぶりの再会だが、いまさら保護室の悲惨な思いなど語りたくもない様だ。話したいことは山ほどあるのに何故か言葉がお互い出ないでいる。私は所在なげにテーブルの端でリズムをとったりした。ガラス窓を雨が激しく叩いている。院庭の木々が風になう。冬の日没は早い、五時だというのに空は禍々しく暗い。

「なんや、心細うなるな」

私は曖昧に笑った。遠くで奇声が響く。二人はひたすら孤独だった。

「一つためになる話聞いたで」

私はテーブルに肘をついて身を乗り出した。妻は私の目を覗くように見つめた。

「こうな、川があつて両岸に男と女がそれぞれ立つとるんや。それで、その男と女はそれぞれ違う風景をみとるんや。で、その川には橋が架かつとつてな、その橋で男と女は歩み寄るしかないんやつて。ええ話やろ」

妻は虚を突かれたような風だった。しかし、首をかしげると、

「私には、わからん」

「なんでや、こう川があるんか。なんていうかたとえ話で一つのメルヘンや。お前、童話好きやろ」

「なんか難しい話して私の頭の中は童話やつて言うの。どうせ、私は学歴もないし頭の中は小学校の道徳の時間やつて言いたいんやろ」

私は誤解を解こうとする。しかし妻は瞳孔が震え、錯乱しかけている。

蜘蛛の巣にかかった獲物のように動けば動くほど糸は絡みついてくる。言葉は空回りして言うべきでない言葉を選びすぎて発してしまふ。私は必死になる。しまいには妻は絶叫した。突然の展開に呆然となって立ちつくし、駆け付けた看護師に取り押さえられた妻が再び保護室行きになるのを私は阿呆のように眺めていた。どうせ私は一人や、と喚き散らした言葉が今も耳の中で鳴り響いてやまない。

「はまり込むのはやめや。あんたの悪い癖や」

大田さんは憐れむように言った。外来ロビーは人がまばらである。私と大田さんはロビーの一番隅の椅子に向かい合って座っている。昨日の事件で一睡もできず、なんだか世界がぼうっとしている。再び保護室行きとなった妻のことを考えそうになるが、ささず意識を他にやる。解離性同一障害というものがあるが、あれは耐えがたい現実があると人間の脳はその現実を見ないように切り離して分断してしまふ。よって新たな違う人格が生まれるのであるが、私もそうなりかけている錯覚に陥る。違う人格が生まれてその人格が私を殺しにくる、そうなればいい。そうしたならそれは自殺になるのだろうか？支離滅裂な考えが頭を巡る。

「髪結いの亭主って映画知っていますか」私は気が付くと唐突にそんな言葉を発していた。自分が喋っている感覚がないのであるが。知つとる、と大田さんは頷く。

「あれはね、この世で一番哀しい映画ですよ、単なるおしゃれ映画にあらず。あの映画を妻と一緒に見たことがあるんですよ」

大田さんは口を固く結んでじっと私を見ている。

「老いて愛されなくなる前に、幸せの絶頂で死んでしまふ。妻は何か考えていたようですが……女の気持ちは馬鹿な僕にはわかりません。でもあの映画を見たことは予兆だったような気がするんですよ」

私は涙が流れるままにした。手の甲に生暖かい液体が落ちた。

「その映画の中盤くらいだったかな、その主人公が亭主に言うんですよ、嘘だけはつかないでって。どう思います？ 嘘をつかずに男と女がやっていきますか、人間社会が成り立ちますか。あれはね、メルヘンですね。女の気持ちのメルヘンです」

「そりゃそうや、みんながああ映画のとおりやったら結婚しとる女は皆水に飛び込まなあかん。あんた、現実と映画を混同しすぎや」

「いいえ、僕は現実を見てます」

「いや、全然見とらん。あんたは夢の中におる」

そうですか、と私は項垂れた。私の考えていることは夢なのであるか。私は自分の考えている事がある意味で普遍性を持つとさえ思っていた。畢竟、私は狂人であってこの遮断された空間から一歩外に出れば、私の主張など戯言に過ぎないのか。

「あなたは健康を目指した方がええで。それこそウォーキングでも参加したらええんや。あんたと志穂ちゃんが別れるかどうか私は知らん。どちらにしてもあんたがよく生きることが、すべてにつながるんちゃうか。まあ、私も偉そうなことは言えんけど」

それもそうかも知れない。昼間よく働いてぐっすり眠り快適な朝を迎える。夢を見ていたかどうか忘れるほど。しかし、私は夢から醒めたくないのだ。一週間後に参加したウォーキングの途中、私は走ってきたトラックと接触した。

私は幸福な男だ。そして妻のことを愛している。こんなに執着して朝から晩まで妻のことを考え続けているのだ、愛しているに違いない。そして私が一人の狂人であることも間違いない。私はウォーキング中に走ってきたトラックの前に発作的に躍り出た。何の因果か、今はどこかの病院のベッドにいる。N病院ではないようだ。足に怪我をしているので外科なのだろう。市内のどこかの病院だとは思うのだが。夜の病室の窓から点在する光を眺める。人々が暮らしているのだ。彼らは幸福だろうか。なぜだか祈りたい気持ちとなった。様子を見に看護師がノックをしてはいってくる。二言三言会話をして、出て行ったが私はその女に欲望を感じた。そして虚しい気持ちになった。

「光ちゃん」

私の名を呼ぶ声がした。驚いて振り返ると妻がベッドわきに座っていた。

「なんで、ここに」

私が問うと、妻は曖昧に笑った。妻はパジャマを着て何故か裸足だった。

「お前、なんで裸足なんや。病院やのに不潔っていうか冷たいやろ」

私はスリッパを探そうと身をねじると足に激痛が走り顔をしかめた。そんな私を妻は不思議そうに見た。

「スリッパなんかいいから、てか、もういいから」

「え、何？」

妻は微笑を湛えながらそっと私に口づけた。

暖かな感触だけが残り幻は消え、再び音のない一人の部屋に取り残された。私は拳を固めて身を震わせながら、あらん限りの声で妻の名を叫んだ。